

## 『恐れなくて、ただ信じていなさい』 (要旨)

聖書箇所：マルコ 5:21-43

「自分はこのままで人生の下り坂を下っていく。そしてその下り果てた所が死だと言うことを知っている。…若い時にはこの死という目的地に達するまでに、自分の目の前に横たわっている謎を解きたいと、痛切に感じたことがある」 (森鷗外『妄想』より)

## 1. 管理できることとできないこと

会堂司ヤイロ。ガリラヤ湖の岸辺に立っておられたイエスのところに駆け寄ってきた人物です。ユダヤ人会堂の管理責任者である会堂司が、誰の目にも留まるかたちで、イエスの脛にかじりつき「娘を救って欲しい」と懇願したのです。彼には死にかけている娘がいました。使いを送り、家で待っていることができず、自らイエスのもとに赴きました。ヤイロは会堂の管理責任者でした。宗教指導者や教師に会堂における御言葉の説き明かしを依頼し、会堂に不具合があれば修繕してきました。ところが、死にかけている娘に関しては、自分の手でどうすることもできませんでした。そんな現実の中、イエスにすがりついて懇願しました。とはいえ、持ち前の管理能力を駆使しました。イエスを自分の家に招くために自ら赴き、手を置いていやしてほしいと、そのやり方を指示しました。ヤイロは娘の救いが自分の力の限界を超えていることを理解していましたが、自分が最善と思われる方法をイエスに提案しました。



人間を超えることのできない決定的な深い溝があるからです。

## 3. 恐れなくて、ただ信じていなさい。

イエスは、訃報を前に「恐れなくて、ただ信じていなさい」と言われました。しかしヤイロからすれば、今となつては何を信じれば良いのかと言う状況です。

私たちは、信じるためにはその取っ掛かりが必要だと考えます。しかしその取っ掛かりがなくなってしまった場面で「恐れなくて、ただ信じていなさい」と言われたのです。ヤイロにとって娘の訃報は、自分ではどうすることもできない事柄でした。しかしイエスはこうした場面で「眠っているのです」と言われたのです。イエスは眠った子に接するように、ヤイロの娘に「起きなさい」と声をかけたのです。

死は私たちにとって自分の力ではどうすることもできない領域です。

死を「(人生の) 下り果てた所」として捉えるならば、死は忌むべきものに他なりません。しかし天地創造のはじめから神と共におられたイエスは、死をそのように捉えてはいません。闇において「光、あれ」(創世記 1:2)と命ずることのできるお方の前に死は眠りに過ぎないからです。私たち人間は死を司り管理することはできません。しかしいのちを司る創造主なる神とともに生きる者は、死を絶望としてではなく、やがて神が「起きなさい」と声をかけてくださるまでの眠りと捉えます。ゆえに私たちの信仰の先輩は、次のように告白しました。

問い：キリストが私たちのために死んでくださったのなら、どうして私たちも死ななければならないのですか。

答え：私たちの死は、自分の罪に対する償いではなく、むしろ罪との死別であり、永遠の命への入口なのです」 (ハイデルベルク信仰問答・問42)

## 2. 希望が絶たれたときに

イエスはヤイロと行動を共にします。ヤイロ直々の嘆願が功を奏したのです。

ところが、そのタイミングに長血を患った女性が登場します。この病める女性は、群衆のどさくさに紛れ、迷信じみた方法で、イエスの衣に触れました。すると癒されたのです。彼女はすぐにでもその場を立ち去ろうと考えましたが、イエスが気づいておられることを知り、身の上話をしました。ヤイロはどんな思いでイエスと共に立ち止ったのでしょうか。「イエスがまだ話しておられるとき」娘の訃報を知らされました。ヤイロは意図しない形で娘の死に直面しました。その知らせは彼に残された希望を断つものでした。死にそうであることと死んだとの間には、